

# わたししの京都

河野裕子

## 盗まれた自転車——七条界限

父が亡くなった。五月五日未明（正確には四日深夜のことかもしれないが）のことであった。朝九時頃、母が起こしに行ったとき、父はもう冷たくなっていたという。父は誰にも知られずひっそりとひとりで死んでいった。

享年八十四。長寿の河野家の人にしては、早死にのほうであろう。急いで滋賀の実家に帰った。父の死に顔は穏やかであった。父とは五十余年をつきあってきたが、あんな穏やかな、いい顔をした父の顔は初めて見た。

晩年はまことにニコニコと腰の低い愛想のよい小さな老人になっていたが、若い日、壮年期の父は、傍らにいただけでも、いつ叩かれるかと恐ろしきで体が凍んでしまうような痲痺持ちの短気な人であった。熊本生まれの

典型的な肥後モッコスだったと思う。子供の頃、少女期のわたしは、父を疎んだ。母に優しくない父をほとんど憎んでさえいたと思う。

滋賀のわたしの実家のある地方では、お通夜の後に火葬場に行く。火葬場の点火スイッチを入れたのは、長女のわたしの役目であった。一夜あけてお骨をあげに行った。父の骨はグラリと崩れて、胸のあたりは薄い茶色に、脚や腕は緑色に変色しているところがあり、

長年使用し続けた種々の薬の影響であろうと思われたが、本当の理由はわからない。父は一生体が弱く、弱い体で働きとおしたのだと、あらためて思った。

父は亡くなる二日前、わたしの息子に車で連れられて京都にやって来た。それは父の強

い希望でもあった。もう相当に体が弱っており、杖にすがって好きな畑仕事だけはやってしたが、動けるうちにどうしても京都の裕子の家をもう一度見たいというのであった。一年前に立ち上げた孫の出版社の新しい事務所を見たいという思いも強かった。

父がやって来た五月三日はいい天気恵まれ、父は機嫌がよく、孫の紅の出たテレビのビデオを三度も見て、「紅ちゃんきれいなあ、紅ちゃんきれいなあ」と何度も言っていて、本当にうれしそうにしていた。父は満足して帰って行った。その事が何よりも嬉しい。

父が亡くなって、父という人が不意に遠近法で見えはじめた。父とは多くを語らなかつたが、父には或る種の直感と人間洞察力があ

り、時々実家に帰ると、ひとことで、そのとき、そのときのわたしの体調や気分を言いあてることがあり、驚かされた。

思い返してみると、父の一生の生活の半分かたくは自転車と共にあったことに気づく。終戦と同時に上海から引き揚げてきた父は、戦後の日本人の辛苦を人一倍背負って生きた人だった。各地を転々として仕事を替え、京都でやつとありついた仕事も会社が倒産の憂き目にあう。仕方なく、ノーパンク液という自転車がパンクしないといううたい文句の液を自家製造して自転車にのせて売り歩いてい

た。その液体が入っていたガラス瓶の筒のかわちもミルク色をした液のこともわたしはよくおぼえている。ノーパンク液はよく売れた。偏屈で短気、非社交的な父ではあったが、不思議な商才があったのかもしれない。というよりも、商売に不向きな性格などと言っているられない、生活を賭けた背水の陣の必死さが父を駆り立てていたというべきであろう。

一九五〇（昭和二十五）年。物のない時代であった。父がやつとの思いで手に入れた中古の自転車は、文字どおりわが家の家計を支えたいせつな商売道具であった。

その何よりもたいせつな自転車を父は引越しのどさくさの中で盗まれてしまったのである。あのときの両親の、生活のどん底にとされた絶望を、四歳のわたしは四歳の動物的な怯えとして、身にしみて味わった。

盗まれた自転車はほどなくして発見された。父が狂ったように捜し回るのを見かねた知人が、京都駅のあたりのノミの市のような所（このことも父が亡くなった今、そういう所があったのかどうか定かではないのだが）で見つけてきてくれたのである。

往年のイタリア映画に「自転車泥棒」という名画がある。わたしは一度か二度見た記憶があるが、今はどんな名画であろうとも見たくない。イタリアと日本と国は違うが、戦後の荒涼とした街の雰囲気は、わたしが見たものとおなじである。自転車一台が人々の死活問題であった時代。その中で学歴も財産もなく知らぬ土地で必死に生きていた父を思うと、わたしには闘志が湧いてくる。父が亡くなって初めて父をえらい人であったと思ひ、父の子であったと思う。

父は五十年以上も毎年、みごとに夕顔の花を咲かせた。今年は種を蒔くまに亡くなってしまった。

（かわの・ゆうこ「塔」選者）